

久万町の将来

久万町の将来の発展を願って

久万町長 河野 修

一 はじめに	九三
二 人づくり	九三
三 産業の振興	九四
四 観光開発	九五
五 生活環境の整備	九五
六 福祉の向上	九五
七 結びにかえて	九六

久万町の将来の発展を願って

久万町長 河野 修

一 はじめに

歳月の流れはまことに早く、合併三十周年の記念すべき日を迎えました。あれから三十年、住みよい町、働きがいのある町、香り高い文化の町づくりを目標に、住民総ぐるみで取り組み、今日見る久万町に発展成長いたしました。

我が国の、戦後四十年間のすばらしい経済成長は、世界が注目し、今日の豊かな日本を築きあげた底力に、全世界の人々が驚嘆しています。しかし、物質的な豊かさを求めてまっしぐらに走り、生産効率の加速度的上昇に酔いしれているうちに、環境破壊と資源の枯渇を代償とする『豊かな社会』は『大きな荒廃』を生みおとしました。さらに、物質的な豊かさを求めた代価として、『人間の喪失』という、あまりにも高価な人間の代償を支払いました。そして今日、やっと、人々は大切なものに気づき、価値観の新しい主流として、物の時代から心の時代へと、国民意識の転換が進みつつあります。

一方、農山村をとりまく環境の変化も厳しく、国際化の進展、農産物の需給の過剰基調、過疎化、高齢化、消費マインドの多様化など、農業・農山村をめぐる情勢は変転きわまりなく、農民の不安は一層高まり、

久万町の将来

重大な局面を迎えています。

このように激しい経済社会の変化の中にもかかわらず、議会のご協力と町民の皆様の英知とご努力により、今日町づくりの先進地として、各方面から高く評価されるまでに成長し、着実に前進しつつあることを、町民各位とともに喜びたいと思います。

この記念すべき三十周年を機として、久万町のさらなる発展を願って、近き未来の町づくりを考えてみました。

二 人づくり

教育は国家百年の計といわれています。『町づくりは人づくりから』と、人間尊重の精神を基調として、生涯教育の理念に基づき、『人間性豊かな人づくり』をめざしてまいりました。

今日の社会は、高度経済成長とともに、もろもろのひずみが生じています。福祉、公害、環境破壊、そして人間疎外等さまざまな問題が生じています。特に物質文明の中に、どっぷりとつかっている間に、人間性喪失の大変な問題を生み、エゴが横行し、甘えは増大する。権利は主張するが義務は全く考えない。このような社会が生まれたのでは、日本民族が没落してしまうのではないかと、心配でなりません。

しかし、ようやく大切なものを失いつつあることに、気づきはじめています。いまこそ『人間性豊かな日本人の育成』をめざして、家庭教育、幼児教育、学校教育、社会教育、文化教育等々、各分野にわたる総合教育を、強力に推進すべきと思います。

人間性回復の場としては、農山村がもつ自然、ふるさと環境は最高の

ものと考えています。人間性豊かで創造力に富んだ青少年の育成に、可能な限りの努力をしたいと考えています。私はこのふるさとの久万に誇りを持ち今日までに整備をした教育諸施設（学校、文化会館、美術館、体育館、海洋センター、ふるさと村に建てた農林業体験実習館、農産加工体験実習館）の機能を存分に発揮し、さらに公民館の充実、図書館、美術館分館（創作、展示）等を建築整備し、久万町のすぐれた伝統文化を傳承し、新しい文化の創造をめざし、心身ともに健康で、愛郷心に満ちた町民を育てる決意を新にしています。

三 産業の振興

合併以来、豊かな町をめざして、懸命に努力して参りました。その中心は農林業の振興であります。

今日の農林業をとりまく環境は、きわめて厳しいものがあります。しかしながら、町の活性化の基本は、いかなる時代の変化があろうとも、農林業の振興をおいてほかにないと確信しています。

農業の振興は、まず土地基盤の整備からと、水田圃場整備に取り組み、あらゆる障害を克服した農家の努力により、可能な面積の八〇%の整備が完了いたしました。その結果、かつては山村の稲単作農業だったのが、今日では新鮮な夏秋野菜の生産地としてよみがえり、阪神市場で高く評価されるまでに成長発展いたしました。これは農協や普及所の皆様の熱心なご指導と、農家の方々のたゆみないご努力の賜であり、心より感謝いたしております。

近年の厳しい農業情勢の中、特に生産性の向上と構造政策推進上不利

な条件をかかえている山間地においては、地域の特性を生かした農業の確立と地域資源の効率的な利活用により、活性化を図ることが緊要であります。このためには、土地利用の高度化と組織の強化を図り、共同出荷や機械の共同利用、更には高度な技術の導入等による、付加価値の高い農業の振興を図ることによって、消費者のニーズにマッチした需要創造型農業に取り組み、売れる農業をめざします。

次に林業については、古来より日本は『木の文化の国』と言われ、経済・社会・文化のあらゆる分野にわたって、広く日本人の生活の中に溶け込んできました。しかるに戦後の政策による木離れと、外材の輸入や代替材の進出により、林業はまさに崩壊の危機に直面していることは、何人も否定できません。しかし、今日、長期的には、海外資源の減少や原木の輸出規制等の動きにみられるように、外材に不透明感が生じており、国産材の時代が到来すると予想されております。

久万町は木にこだわり続け、木と共に歩んできた歴史があります。町の総面積の八四%は森林であります。この資源の活用・活性化こそ、町づくりの最大課題と認識しています。合併以来、先輩各位のご努力により、人工造林率は全国一を誇り、優良木生産への努力は高い評価を受けております。今年（平成元年七月）は『ふるさとの森事業』の成果と合わせて、緑化功労団体として、内閣総理大臣賞を受賞いたしました。林業家諸兄姉の今日までのご苦勞に感謝しています。

今後の林業振興は、需要の拡大にあります。川上から川下までが一体となった国産材の低コスト化と、安定供給体制づくりが課題であります。一般産業と同じく、販路の確保と需要拡大に血のにじむような改革・改

善の努力が必要と思います。木材加工施設の一層の充実と、製品センターの開設等の流通対策を積極的に進めるとともに、地域林業の担い手対策に勇敢に取り組む、林家が安心して林業にいそむことのできる体制づくりを進めます。

四 観光開発

日本人は歴史的にも、自然と共存し、自然の厳しさの中で、巧みに自然の力を利用し、独創的な文化を形成してきました。自然の中で育った豊かな感受性・芸術性が、日本人の精神生活を豊かにし、農耕生活や勤労が、協調性や丈夫な身体を生み、心身ともに健全に育ってきたと思います。しかるに、戦後の都市化・工業化により、自然との接触や人々との共存関係が次第に失われています。そのことが無関心・無感動・無気力・孤独・人間性の喪失等の現象を生みだしています。

このような現状が憂慮され、今日あらためて、自然との触れ合いが、声高くさげばれています。そのなかで、生命や自然への畏敬の念を持ち、自然と調和して生き、豊かな人間性を回復する場としての農山村が、強く求められています。そこで久万町は、現在進めています体験・学習型観光を更に進めて、山村リゾート地としての開発を考えております。

更に、余暇時間の増大・レクリエーション需要の増大と相まって、リゾート空間・ふるさと空間としての役割が増えると思われれます。既設の各施設の充実を図り、滞在型の交流拠点施設として、ラクビー場やサッカー場、キャンプ場の整備を進め、健全なスポーツ・レクリエーションから美術鑑賞など、快適で特色ある場と機会を提供し、訪れる

人々との交流や対話、自然との触れ合いを通じて活力ある観光の町づくりを進めます。

五 生活環境の整備

住民が、より便利で、より快適な生活のできる町づくりを進めてきました。道路、水道、し尿・ごみ処理、保健、医療等の諸施設の整備を進め、大部分は完成を見ることができました。

住民の願いである三坂トンネル、上尾峠久万線の開通、県道美川松山線の改良促進等、これら工事の早期着工に鋭意努力する決意であります。一方、遅れております下水道事業の推進は、町の大きな課題の一つであります。人口密集地域の下水道と農村部の集落排水施設を、ぜひ実施したいと思っております。これらの施設は、一部を受益者負担をお願いすることになります。皆様方のご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

この町を訪れるだれもが、住んでみたくなるような町の環境美化こそ、将来の久万町の発展を約束するものと考えております。

六 福祉の向上

社会福祉の見直しが政治問題として、大きな反響をよんでおります。物質的に豊かで便利な社会になったことは、お互いに結構なことなのですが、反面助け合いの必要が薄くなり、徹底した利己主義の横行は、協力の美しい心などを、全く失わせようとしています。

福祉には自助、協助、扶助の三つの要素があります。この三つが思い

やりに満ちた心で調和してこそ、すばらしい福祉社会が生まれるものと思います。そこで今行われている社会福祉でいちばん大切なことは、感謝の心を養うことが基本であると考えています。

すばらしい長寿社会が生まれました。長寿社会をすばらしいものにするためには、まず長寿を、明るく老いを誇れるような、社会的パターンづくりが大切であります。人間の最高の幸せは、健康で生きがいのある生活にあります。まず高齢者の健康づくりに、積極的に取り組みたいと思います。

また、自分の生まれ育った家庭で、子や孫に囲まれて暮らすことのできる体制づくりに努めます。家庭奉仕員を増員し、在宅福祉の向上を図るとともに、福祉施設（特別養護老人ホーム）を誘致し、デイサービスやショートステイの実施計画も進め、老後が安心して暮らせる施設を整備し、本場に役立つ福祉・むだのない福祉の向上をめざします。

七 結びにかえて

新町発足以来、常に積極的な町づくりを進めてまいりました。合併当時は、先輩のご努力で造られた美林が、町の財政に大きな役割を果たしました。お蔭様で積極的な行財政の推進にもかかわらず、健全財政を堅持することができました。今日では材価が低迷しており、町有林に財源を求めることができません。町有林は今力を蓄積する時代であります。

町の財政は、国からの交付税と町税、国や県からの負担金、補助金、起債で賄っております。当然のことながら、積極的な行財政の改革と効率的な財政運用と節減に務め、増加する住民のニーズに対応しています。

が、一方では町民の皆様のご理解とご協力をいただき、それぞれの役割分担をお願いする次第であります。こうして健全財政を堅持するなかで、積極的な町づくりこそ、私の理念でもあります。

かつて私たちは、あちこちと地域づくり先進地へ出かけて行って、多くのことを学びました。最近では、先進地視察だといって、久万町へずいぶん大勢の方が、視察にみえられます。

町の持っている資源、素材、特性をうまく活用し、知恵をしぼって、町ぐるみで、地道な努力を重ねれば、必ず新しい展望が開け、久万町の前途は洋々たるものと信じています。

豊かで真に住みよい町、本当の意味での福祉の町づくりは、私たち行政に携わる者の、すべてに課せられた永遠の課題であり、目標ではありません。こよなく愛する久万町の未来の発展を願って、一意専心、全力を傾注することを誓うものであります。

町村長・助役・収入役・議会議員名簿

菅生村 村長・村會議員名簿

明神村 村長・助役・収入役・村會議員名簿

父二峰村 村長・助役・収入役・村會議員名簿

川瀬村 村長・助役・収入役・村會議員名簿

久万町 町長・助役・収入役・町會議員名簿

新久万町 教育長・議長・副議長・常任委員長・副委員長

菅生村歴代村長



第一代
井部 栄 範



第三代
小 倉 強



第四代
大 野 金 作



第五代
秋 本 半 次



第六代
尾 首 政 太 郎

町村長・助役・収入役・議会議員名簿

明神村歴代村長



第一代
船田信衛



第二代
山之内 誠一郎



第三代
正岡慶三



第四代
高井寛和



第五代
丸山常太郎



第六代
田中 執



第七代
正岡公平



第八代
宇都宮 照 蔵



第一代
大野直栄



第四代
長尾二男



第三代
宮脇順



第二代
白石格



第七代
高岡信栄



第六代
大野助直



第五代
佐伯研治



第十代
横田重市



第九代
竹井薰



第八代
大野貞一郎

父二峰村歴代村長

川瀬村歴代村長



第五代・十二代
小椋豊吉



第三代
岡小八



第二代
大野音衛



第九代・十六代
小椋貞次郎



第八代
稲田金五郎



第七代・十一代
小倉盛彦



第十四代
大野鶴吉



第十三代
渡部紋平



第十代
光田太蔵



第十八代
大西 清一



第十七代
渡辺 善太郎



第十五代
尾花 利一



第二十一代
日野 泰



第二十代
大野 浅五郎



第十九代
大野 仙太郎

久万町歴代町長



第一代
桜井誠政



第二代
船田源松



第三代
高橋精一郎



第四代
井部榮基



第五代
八木菊次郎



第六代・八代
高野義唯



第七代
井部榮治



第九代
高岡貞一郎



第十代
相原芳太



第十一代
日野泰



第十二代
河野修

菅生村村長名簿

代	就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
組頭	明治七年五月三日	不	不明	不明	安藤 国八
戸長	明治三年二月	明治三年六月	三年	不明	井部 栄範
戸長	明治三年〇月	明治六年九月	三年	不明	秋本 富士郎
戸長	明治六年	明治三年三月	三年	不明	井部 栄範
初代 村長	明治三年一月五日	明治三年一月二五日	三年	不明	井部 栄範
二	明治三年一月三日	明治三年四月〇日	三年	不明	宇和川 仁平太
三	明治三年四月二九日	明治三年四月〇日	四年	不明	小倉 強
四	明治四年四月二五日	明治四年三月五日	五年	不明	大野 金作
五	明治四年三月六日	大正四年三月五日	四年	不明	秋本 半次郎
六	大正五年三月三日	大正九年三月二日	四年	不明	尾首 政太郎
七	大正九年四月八日	大正三年二月〇日	四年	不明	高井 寛和

菅生村議会議員名簿

当選年月日	退任年月日	任期	事由	氏名
明治五年 四月一日	明治六年 三月〇日	三年間	満期	秋本 富士郎
"	"	"	"	梶川 嘉平
"	"	"	"	相原 紋蔵
"	"	"	"	井上 鹿太郎
"	"	"	"	大野 金作
"	"	"	"	上沖 力蔵
"	"	"	"	大野 音五郎

町村長・助役・収入役・議会議員名簿

代	就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
明神村長	明治八年頃	明治六年一月六日	不明	三村合併による	船田 信衛
戸長	明治八年頃	明治六年一月六日	不明	三村合併による	山之内 誠一郎
戸長	明治八年一月七日	明治三年三月三日	五年	町村制実施による	山之内 誠一郎
初代 村長	明治三年一月	明治三年八月一日	一年	不明	船田 信衛
二	明治三年八月六日	明治五年二月〇日	二年	"	山之内 誠一郎
三	明治五年二月五日	大正 年 月 日	不明	死亡	正岡 慶三
四	大正六年一月六日	大正 年 月 日	三年	辞任	高井 寛和
五	大正九年三月二日	大正三年三月〇日	四年	満期	丸山 常太郎
六	大正三年八月五日	昭和八年二月三日	九年	辞任	田中 執

明神村村長名簿

明治五年 四月一日	明治六年 三月〇日	三年間	満期	大野 豊吉
明治四年 三月六日	明治三年 三月〇日	不明	不明	梶川 嘉平
"	"	"	"	片山 官次郎
"	"	"	"	若本 吉太郎
"	"	"	"	井上 鹿太郎
"	"	"	"	細川 直吾
"	"	"	"	日野 伊平
"	"	"	"	大野 音五郎
"	"	"	"	大野 豊吉

町村長・助役・収入役・議會議員名簿

七	昭和八年三月八日	昭和四年七月七日	五年	〃	正岡公平
八	昭和四年二月一日	昭和八年八月三日	四年	明神村 へ止久万町 合併	宇都宮照蔵

明神村助役名簿

就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
明治七年一月五日	明治三年八月六日	六年	村長就任により	山之内誠一郎
明治三年九月二日	明治五年二月〇日	二年	〃	正岡慶三
明治三年一月七日	明治五年一月六日	八年	満期	山之内猿太郎
明治五年三月一日	大正四年七月三日	三年	辞任	丸山仲蔵
大正四年八月六日	大正五年三月二日	一年	〃	宇都宮佐市
大正七年三月八日	大正九年三月二日	二年	村長就任により	丸山常太郎
大正二年一月三日	大正三年八月五日	二年	〃	田中執
大正四年九月三日	昭和四年九月二日	九年	辞任	鈴木繁男
昭和五年五月〇日	昭和六年一月三日	一年	〃	山之内高蔵
昭和六年五月九日	昭和八年八月三日	二年	久万町へ合併	尾形旧四郎

明神村収入役名簿

就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
明治七年六月九日	不	不明	〃	棟田伴蔵
不	明治三年九月二日	〃	助役就任につき	正岡慶三
明治五年三月三日	明治四年三月三日	八年	任期満了	石田精三郎
明治四年三月三日	大正四年八月二日	四年	辞任	棟田伴蔵
大正四年八月四日	大正五年一月八日	一年	〃	小倉四郎

大正五年四月三日	昭和五年五月二日	昭和八年四月三日	昭和八年七月八日	昭和三年一月七日	昭和六年六月五日	昭和六年八月三日
昭和五年五月〇日	昭和八年四月三日	昭和三年二月五日	昭和三年五月九日	昭和六年六月五日	昭和六年八月三日	昭和六年八月三日
四年	三年	四年	三年	二年	三年	二年
任期満了	任	満期	助役就任につき	久万町へ合併	久万町へ合併	により辞職
大野孫衛	尾形旧四郎	宇都宮佐一	尾形旧四郎	露口隆市	尾形旧四郎	露口隆市

明神村村會議員名簿

当選年月日	退任年月日	任期	事由	氏名
明治四年四月一日	明治五年三月三日	二年	満期	船田信栄
〃	〃	〃	〃	大野房蔵
〃	〃	〃	〃	平岡伸次郎
〃	〃	〃	〃	山之内磯次
〃	〃	〃	〃	山之内政次
〃	〃	〃	〃	宇都宮順三郎
〃	〃	〃	〃	小倉団十郎
〃	〃	〃	〃	平岡孫三郎
〃	〃	〃	〃	宇和川柳蔵
〃	〃	〃	〃	山之内誠一郎
明治六年一月一日	明治六年三月八日	三年	満期	小倉団十郎
〃	〃	〃	〃	正岡好太郎
〃	〃	〃	〃	山之内磯次
〃	〃	〃	〃	石田精三郎
〃	〃	〃	〃	小倉卯大郎
〃	〃	〃	〃	石丸駒三郎

明治二年一月二日	不	こ	明治六年三月九日	不	明治六年一月一日	明																	
〃	〃	の	〃	〃	明治六年三月八日	明																	
〃	〃	間	〃	〃	三年	明																	
〃	〃	不明	〃	〃	満	明																	
〃	〃	不明	〃	〃	〃	明																	
〃	〃	不明	〃	〃	〃	明																	
正岡惣三郎	宇都宮栄義	小倉熊吉	棟田伴蔵	山之内政治	正岡孫三郎	欠員	宇和川柳蔵	欠員	山之内政次	大野勇大郎	欠員	小倉卯太郎	石田精三郎	山之内磯次	正岡好太郎	小倉団十郎	正岡孫三郎	船田信栄	宇和川柳蔵	八鬼助衛	山之内政次	大野勇大郎	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
昭和五年一月六日	昭	こ	大正七年三月五日	不	明治四年一月二日	明																	
〃	〃	の	〃	〃	〃	明																	
〃	〃	間	〃	〃	〃	明																	
〃	〃	不明	〃	〃	〃	明																	
〃	〃	不明	〃	〃	〃	明																	
〃	〃	不明	〃	〃	〃	明																	
山之内佐太郎	正岡久市	河口佐市郎	小倉四郎	大野宗吉	正岡幸作	山之内佐太郎	石丸寅之助	村上好十郎	棟田政十郎	大野宗吉	宇都宮順三郎	山之内丑蔵	宇都宮助一郎	大野丑太郎	松田金五郎	田中九乎	八鬼松次郎	松田金五郎	山岡峯三郎	正岡勘次郎	小倉卯太郎	高橋市次郎	

父二峰村助役名簿

就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
明治三年一月七日	明治三年二月九日	一年	不	石丸 島造
明治四年二月六日	明治三年二月六日	八年	満	宮脇 順
明治三年五月〇日	明治三年六月一日	二日	不	岡田 伊太郎
明治三年六月四日	明治四年四月三日	二年	不	宮脇 順
欠員				
明治五年二月五日	明治六年二月三日	三年	不	大野 正行
明治六年二月七日	明治四年三月〇日	"	"	越智 源作
明治四年七月一日	大正六年三月六日	九年	満	大野 熊次郎
大正七年一月四日	大正二年一月三日	四年	満	杉岡 定治
大正二年四月一日	大正五年三月三日	"	"	宮脇 順
大正五年八月六日	昭和二年三月〇日	一年	不	白石 竹松
昭和二年三月〇日	昭和六年三月九日	四年	満	和田 三美
昭和六年四月〇日	昭和三年一月五日	七年	不	宮田 道孝
昭和三年二月三日	昭和七年二月三日	四年	満	中山 春本
昭和七年五月一日	昭和二年一月七日	"	"	大野 貞一郎
昭和三年三月八日	昭和三年四月五日	一年	村長就任	竹井 薫
昭和三年七月三日	昭和四年三月〇日	二年	父二峰村廃止	川本 道宗

父二峰村収入役名簿

就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
明治三年一月七日	明治七年五月四日	四年	満	大野 直栄

町村長・助役・収入役・議会議員名簿

父二峰村村会議員名簿

当選年月日	退任年月日	任期	事由	氏名
明治七年五月五日	明治三年二月六日	五年	助役就任	宮脇 順
明治三年六月一日	明治五年六月四日	四年	満	大野 直栄
明治六年七月三日	大正四年七月三日	一二年	"	高岡 秀吉
大正五年一月六日	大正五年四月二日	三月	不	榎井 喜惣
大正五年六月五日	大正六年三月五日	一年	"	松岡 定治
大正七年一月三日	大正七年二月〇日	一月	"	白石 竹松
大正七年二月五日	大正四年三月六日	七年	"	田中 鶴吉
大正四年五月七日	昭和二年十月三日	二年	"	西岡 槌一

当選年月日	退任年月日	任期	事由	氏名
明治三年一月	明治三年三月	三年	満	岡田 伊太郎
"	"	"	"	和泉 覚左郎
"	"	"	"	大野 直栄
"	"	"	"	白石 常治
"	"	"	"	井上 勝蔵
"	"	"	"	植田 嘉蔵
"	"	"	"	大嶋 与吉
"	"	"	"	向居 宗一郎
"	"	"	"	畑野 仙十郎
"	"	"	"	大野 百太郎
"	"	"	"	高岡 秀吉
"	"	"	"	河崎 安治郎
明治六年一月	明治六年三月	"	"	岡田 伊太郎

久保米四郎	黒田熊衛	井口利太郎	露口寅太郎	白石栄枝	大嶋正男	竹井薫	田中鶴吉	石田岑義	成野覚	佐伯忠行	河野常喜	桃枝松雄	田中清春	川口和一	竹内賀寿	高松誠一	寺岡賢勇	武田源作	小泉フジエ	土居詩嘉雄	露口寅太郎	宮田寅傳	山下定夫
昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日
昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日
四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年
満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期
森幸教	青木照美	武田源作	上岡照雄	恩地義一	永尾義秋	若松佐吉	高木藤十郎	宮田傳	植田要	桃枝松雄	山中義志	窪田操	竹内賀寿	中田仲一	久保徹	山下高雄	植田要	中田仲一	高岡直行	原畑重治郎	和泉初男	上岡照雄	高松誠一
昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日	昭和三年 四月三日
昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日	昭和三年 三月三日
四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年	四年
満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満	満
期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期	期
町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による	町村合併による

川瀬村村長名簿

昭和三年 四月三日	昭和三年 三月三日	三年	町村合併による	青木照美
"	"	"	"	玉水義浦
"	"	"	"	白石研太郎
"	"	"	"	恩地義一
"	"	"	"	成野義一
"	"	"	"	桃枝松雄
"	"	"	"	竹内賀寿
"	"	"	"	中田千鶴
"	"	"	"	久保数市

代	就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
史生	明治五年	明治八年	三年	死亡	土居準之助
戸長	明治八年	明治六年	八年	不明	土居孫衛
戸長	明治二年	不	不明	"	戒能鎮
戸長	明治三年	"	"	"	近藤景行
戸長	明治五年	明治三年	七年	町村制実 施により	武智懋
戸長	明治三年	明治三年	一〇年	"	小黒市作
初代 村長	明治三年 九月二日	明治三年 七月十日	八年	満期	足利純太
二	明治三年 九月二日	明治三年 十月五日	二年	不明	大野音衛
三	明治三年 十月十日	明治三年 三月二日	一年	"	岡小八
四	明治三年 二月十日	明治三年 三月五日	一年	"	渡部保太郎
五	明治三年 五月九日	明治六年 八月六日	三年	"	小椋豊吉
六	明治元年 八月五日	明治元年 七月三日	二ヶ月	県議就任 により	大西平三郎

町村長・助役・収入役・議會議員名簿

川瀬村助役名簿

就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
明治三年 一月三日	明治七年 一月十日	四年	満期	小倉宗衛
明治七年 一月三日	明治三年 九月十日	"	村長就任	大野音衛
明治三年 十月三日	明治三年 三月十日	三年	"	渡部保太郎
明治三年 一月三日	明治六年 七月十日	五年	不明	竹内重貴
明治元年 七月元日	明治四年 七月六日	四年	満期	渡部紋平

七	明治元年 八月三日	明治四年 十月八日	一年	不明	小倉盛彦
八	明治四年 十月九日	明治四年 五月一日	三年	"	稲田金五郎
九	明治四年 六月七日	大正一年 三月九日	一年	"	小椋真次郎
〇	大正二年 六月二日	大正二年 十月五日	三ヶ月	"	光田太藏
一	大正二年 四月九日	大正七年 四月八日	四年	満期	小倉盛彦
二	大正三年 五月二日	大正二年 五月〇日	四年	"	小椋豊吉
三	大正二年 五月三日	大正五年 五月九日	四年	"	渡部紋平
四	大正五年 六月六日	昭和三年 五月四日	二年	不明	大野鶴吉
五	昭和三年 六月三日	昭和八年 二月三日	四年	満期	尾花利一
六	昭和八年 四月三日	昭和三年 四月三日	四年	"	小椋真次郎
七	昭和三年 四月六日	昭和六年 四月七日	四年	"	渡辺善太郎
八	昭和六年 七月一日	昭和九年 九月三日	三年	不明	大西清一
九	昭和九年 九月三日	昭和三年 二月七日	二年	"	大野仙太郎
〇	昭和三年 四月五日	昭和六年 四月四日	四年	満期	大野浅五郎
一	昭和六年 四月三日	昭和三年 三月三日	八年	併久万瀬村 之施合止 により	日野泰

代	期	間	議	長	副	議	長
初代	昭和四二年	五月四日	篠崎隆美	竹井薫			
	昭和四三年	四月九日					

新久万町歴代議長・副議長名簿

代	就任年月日	退任年月日	任期	退任事由	氏名
初代	昭和四二年五月六日	昭和四二年一月三日	七年	死亡	小倉総一郎
二	昭和四四年四月三日	昭和四五年六月八日	一三年	任期満了	小椋秀雄
三	昭和四五年七月五日	現在			日野嘉彦

新久万町歴代教育長

	昭和六年四月六日	平成三年四月九日	四年	満	岡田舜三
	"	"	"	"	中川鶴雄
	"	"	"	"	佐伯正俊
	"	"	"	"	染次集
	"	"	"	"	真木孝志
	"	"	"	"	菅留八
	"	"	"	"	日野朝幸
	"	"	"	"	渡部新雄
	"	"	"	"	石田佐々雄
	"	"	"	"	高岡保典
	"	"	"	"	高野淳雄
	"	"	"	"	中田重雄
	"	"	"	"	福水千代重
	"	"	"	"	西岡忠義
	昭和六年五月六日			死亡	

新久万町歴代常任委員長・副委員長名簿(総務)

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
二	昭和五二年四月九日	昭和五二年四月二日	小椋節三郎	安部一義	
三	昭和五二年四月二日	昭和五二年四月五日	中田千鶴	高野晋作	
四	昭和五二年四月五日	昭和五二年四月八日	大野信之	菅野万夫	
五	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	河野修	神野寅雄	
六	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	河野修	恩地義一	
七	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	大野直長	八木修一郎	
八	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	河野修	石丸修亨	
九	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	河野修	石丸修亨	
一〇	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	加藤亨	二宮岸雄	
一一	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	西岡忠義	上岡義幸	
一二	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	正岡豊	尾花豊	
一三	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	上岡健市	西森匠	
一四	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	上岡健市	岡田元一	
一五	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	中田重雄	大野卓	
一六	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	菅利三郎	佐伯正俊	
一七	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	菅利三郎(死亡)	中川鶴雄	
一八	昭和五二年四月三日	昭和五二年四月八日	山之内(死亡)	大野隆則	
一九	昭和五二年四月八日	昭和五二年四月三日	佐伯正俊	大野隆則	

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
初代	昭和四二年五月五日	二年	大野信之	小椋節三郎	
二	昭和四二年五月二日	"	大野信之	片岡充雄	
三	昭和四二年五月八日	一年	小椋節三郎	八木修一郎	

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
四	昭和元年六月七日	一年	正岡 豊	関井 義弘	
五	昭和四年四月三日	"	小倉 清澄	上岡 義幸	
六	昭和四年五月六日	"	石岡 作衛	関井 義弘	
七	昭和四年五月一日	"	正岡 豊	加藤 学	
八	昭和四年四月三日	二年	正岡 豊	加藤 学	
九	昭和六年五月二日	"	西岡 忠義	上沖 健市	
一〇	昭和六年四月七日	"	小倉 清澄	西森 匠	
一一	昭和五年五月三日	"	上沖 健市	高岡 保典	
一二	昭和五年四月七日	"	中田 重雄	大野 隆則	
一三	昭和五年五月二日	"	中野 優	沼田 健男	九月八日より大野隆則
一四	昭和五年五月八日	"	西森 匠	篠浦 弘明	
一五	昭和五年五月二日	"	山之内 正昭	森川 照雄	
一六	昭和六年五月九日	"	佐伯 正俊	石田 佐々雄	
一七	昭和六年五月六日	"	日野 朝幸	染次 集	

新久万町歴代常任委員長・副委員長名簿（厚生文教）

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
初代	昭和三年五月二日	二年	神野 寅雄	大野 直長	
二	昭和三年四月二日	"	長田 統	古田 実	
三	昭和三年五月八日	一年	高岡 信栄	大野 直長	
四	昭和元年六月七日	"	尾花 進	金子 佐々雄	
五	昭和四年四月三日	"	西森 勅	日野 常行	
六	昭和四年五月六日	"	正岡 侶則	日野 常行	
七	昭和四年五月二日	"	西岡 忠義	秋本 清繁	

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
八	昭和四年四月三日	二年	小椋 節三郎	篠浦 弘明	
九	昭和四年五月二日	"	篠浦 弘明	正岡 侶則	
一〇	昭和四年四月七日	"	大野 卓	奥村 進	
一一	昭和五年五月三日	"	岡田 元一	大野 卓	
一二	昭和五年四月七日	"	二宮 岸雄	山岡 勇	
一三	昭和五年五月二日	"	中田 重雄	山之内 正昭	
一四	昭和五年五月八日	"	山之内 正昭	中川 鶴雄	
一五	昭和五年五月二日	"	大野 隆則	菅 留八	
一六	昭和六年五月九日	"	神西 伊佐男	日野 朝幸	
一七	昭和三年五月六日	"	森川 照雄	渡部 新雄	

新久万町歴代常任委員長・副委員長名簿（経済）

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
初代	昭和三年五月二日	二年	高岡 晋作	大野 輝光	
二	昭和三年四月二日	"	高岡 信栄	小倉 清澄	
三	昭和三年五月八日	一年	大野 輝光	恩地 義一	
四	昭和元年六月七日	"	日野 常行	神志那 芳臣	
五	昭和四年四月三日	"	日野 哲	西岡 忠義	
六	昭和四年五月六日	"	金子 佐々雄	上岡 義幸	
七	昭和四年五月一日	"	上岡 義幸	日野 秀雄	

四四年四月二三日の議会において経済の常任委員会は、建設と統合し廃止された。

新久万町歴代常任委員長・副委員長名簿（建設）

代	就任年月日	任期	委員長	副委員長	備考
初代	昭和三年五月三日	二年	高岡信栄	北岡敬蔵	
二	昭和六年四月二日	"	日野統	二宮岸雄	
三	昭和六年五月八日	一年	光田繁光	小倉清澄	
四	昭和元年六月七日	"	中田重雄	正岡侶則	
五	昭和四年四月三日	"	石丸亨	金子佐々雄	
六	昭和四年五月六日	"	神志那芳臣	山本忠富	
七	昭和四年五月一日	"	二宮岸雄	正岡侶則	
八	昭和四年四月三日	二年	上岡義幸	上沖健市	産業建設委員 会と改称
九	昭和四年五月二日	"	曾我定之	神西伊佐男	
一〇	昭和六年四月七日	"	上沖健市	岡田元一	
一一	昭和五年五月三日	"	沼田健男	中田重雄	
一二	昭和五年四月七日	"	上岡義幸	中野優	
一三	昭和五年五月二日	"	菅利三郎	神志那芳臣	
一四	昭和五年五月八日	"	菅留八	日野朝幸	
一五	昭和五年五月二〇日	"	神志那芳臣	神西伊佐男	
一六	昭和六年五月九日	"	和田藤平	渡部新雄	
一七	昭和三年五月六日	"	中田重雄	石田佐々雄	

